

---

## Q、異世界で逆ハーレムは成立するのか？

星野由羽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Q、異世界で逆ハーレムは成立するのか？

### 【Nコード】

N7429X

### 【作者名】

星野由羽

### 【あらすじ】

Q、異世界で逆ハーレムは成立するのか？

A、無理だろ。無理無理。

ただの恋愛ゲー達人、秀名は、ある日異世界に召喚される。その目的は、「六人の愛する息子たちに、本当の恋愛を教えてあげてほしい」とのこと。

ただ、遊び人はいるわ、女嫌いはいるわ、冷血人間はいるわ、さらには根っからのホモいるわで、大苦戦なんですけど!？

異世界で、秀名はハーレムを作ることができるのか。そして、本当

の恋愛ができるのか？

## 第一の問い「何が違うのか」

ああ、何か違うな。

あたしは、目を覚ます前から、違和感に気が付いていた。

背後でざわめく木々の声、ほつぺたに感じる、葉っぱの冷たい感触。遠くで鳴く、何かの獣の鳴き声。

あたしは、自問自答してみる。

Q、何が違うのか。

A、世界も、自分も、何もかも。

数時間前

「……………」

お菓子のごみ袋が散乱している部屋の中で、少女の声は響く。

なんて、かつこい書き出しで始めてみました。

あたしの名前は保崎ほさき 秀名ひしな。男でも女でもとれる名前だけど、あ

たしは一人称からわかる通り、女だ。

今は引きこもり中。うつとおしい前髪を頭の上でくくり、左右にたれてくる短めの後ろ髪は、ピン止めでピタツと止める。女子力？

何それ食べ物？ 状態の、思いつき「腐女子」の高校生です。

そんなあたしは、目の前にコンパクトな、年季が入っているゲーム機を手に取り、「男子攻略」中。

画面の向こうには、机が散らばる教室に、うつとりするような金髪を持った、生徒会長があたしに向かって話しかける。

生徒会長：『俺、生徒会あったんだけど……………何の用？』

話の途中で頭を掻く、リアルぶりだ。

あたしは動揺する様子を見せずに、「彼」に向かって言葉を投げつける。

ヒイナ：『別に……よっ、用なんてたいそうなものじゃないんだけど、聞いたそうだから言っておけるっ！』

ふっ、「彼」のタイプはツンデレキャラだ。あたしはその役を演じるだけ。

すると、予想通りに顔を赤くし、頬を掻く「彼」。

あたしはその反応にガッツポーズをし、「黙る」のコマンドを選ぶ。

「どんなセリフでも来い……ま、その言葉は決まってるけど」

あたしが身構えると、思い通りの言葉が返ってきた。

生徒会長：『あのさ……いきなりだけど……ずっと、お前のこと、いいなって、思ってたんだ……その、っ、付き合ってくれないか……？』

来たーっ！

「全コンプリートっ！ よし、このゲーム終わり」

あたしは、画面の向こうの「彼」に目もくれず、セーブもせず、電源を切った。

ぱ、と黒い闇が広がる。その画面に、頭がぼさぼさで、中学校時代のジャージを着たあたしが映った。

高校に、入学式合わせて三日しか行っていない、ダサいあたし。おしゃれな雑誌なんて買ったことがない、流行に乗り遅れているあたし。恋愛ゲームの達人だけど、実際の恋愛なんてしたことがないあたし。

「……はっ、次のゲーム！ 昨日発売だった新作の！ やろう、やろうー！」

下がってきたテンションを上げ、パチリ、と電源を入れた、次の瞬間。

ゲーム機の画面が、ぐにやりと曲がる。

「え？ まさか、パグ？」

叩いてみたが、治る感じはしない。

それどころか、波紋は広がり、ついには気味が悪くて手を放す。しかし、黒い渦は、二次元を超え、三次元に突入。その黒い渦に、あたしの手が呑み込まれる。

それが、あたしの見た、この世界の最期だった

「ってことは、死んだのかな、あたし」

目を開けずに呟いてみる。

もちろん誰も答えない、と、思ったその時

「あの一……生きていますか……？」

おどおどした、腰が低そうな男性の声が聞こえてきた。

## 第二の問い「この二人はなんなのか」

「あの……聞こえていますか……?」

その声は、徐々に声が低くなっていき、ざっざっ、という後退する音も聞こえてきた。

気配からして察するしかないのだが。

「あのお……お願いですから聞こえていたら返事してえっ!」

ただだ、とこちらに走ってくる音とともに、耳元で怒鳴られる。

「聞いてるわばか野郎ーっ! 鼓膜敗れるだろーっ!」

あたしもむくりと起き上がり、耳元で怒鳴ってやった。

ひえっ、と声を上げ、小動物のように縮こまる、例の人物。

「お願いですから、大声を出さないでください……!」

ビビりながらそういうやつ顔は、結構、

「イケメンだ……!」

そう、日本人離れた高い鼻、ややタレ気味の目、ふんわりとやわらかそうな唇、ふわふわなほっぺ。それらが絶妙なバランスでおかれている。

て、天から舞い降りたエンジェルやーっ!

そう。短めの紙はくるくるにまかれているし、白を基調とした、ナポレオンのような洋服。ほっそりとした手足は、あたしが力を入

れるとすぐに折れそう。

「あの、テイクアウトで！」

「はあ……？」

いきなり怒鳴ったあたしに、はてなマークを出す、エンジェル。

ああ、その困った顔もかわいい……。

あたしが、エンジェルの顔をじとーっといっていると、後ろからぱこっ、となにかで頭を叩かれた。

意外と強烈……。

「いったー……誰よ、殴ったのはっー！」

あたしが後ろを向くと、そこには、手に凶器を持った、殺人鬼。

ではなく、

「またもやーっ!？」

黒髪の美少年が立っていた。

エンジェルの子と顔たちはよく似ている。黒髪も、ストレートではなく、毛先が少し、くるっと回っている。釣り目がちな瞳は、闇のような黒。こっちのイケメンは、黒を基調とした、エンジェルと同じつくりの服を着ている。

そんな彼は、あたしを不審そうにじーっと見て、こういった。

「このブス、処刑してもいいか？」

ふざけるなーっ！



「ああもう、やっぱりそう来たか、乙女ゲーの定番、冷血人間っ！」

うん、黒髪と来たらそれだよな。……じゃなくて！

「は？ 何が言いたいんだ？ おい、ジェル。この女を連れて行け」

そついわれ、はひっ！？ と肩を震わすエンジェル君。いや、ジェル君。

名前もかわいいんだから。

「あの、お兄様……本当に、連れて行くんですか……？」

「そつだ。おい、立て。動けないともなると、お前はデブでブスと  
いうことになるぞ」

そついいながらも、腕を引いてあたしが立つお手伝い。

高感度、二十up。

「早く連れて行くぞ。おう、右のほう持て」

「は、はい」

二人のイケメンに挟まれ、あたしはきれいな緑色の草の上に、赤い鼻血をまき散らしました……。

Q、この二人はなんなのか。

A、この後わかります。

「いやあー、はっはっは。まさか森で倒れてしまつとはね。あっはっは、はっはー！」

豪快に笑うおじさんの前で、あたしは正座をしています。

下にはふかふかの、赤いカーペット。上にはキラキラのシャンデリア。そこには、メイドさんがずらあーっ。ついでに兵隊さんもずらあー。

目の前に座っているおじさんは、豪華な、金色の椅子に足を組んで座り、頭には大きな冠。真っ赤なマントがよく目立つ。そして、服装は、王様風。

いやあ、カボチャパンツはいているおじさん、生きているうちに拝見できたよ。よかつたよかつた。

「つてじゃなくてーっ！」

「誰に言っているのかね？」

「違います、違うんですすみませんっ！」

「うるせーよ黙れブス」

あたしの隣に立っている、あの冷血人間が言葉という名の矢を放つ。

クリーンヒット！

胸を抑え、うずくまるあたしに、おじさんは、「これ、レイ」と、まったくとげのない叱り方。

甘やかすなよ！

「つていうか、誰なんですか、あなた。あたし、まったく状況読めていないんですけど」

「読めなくて当たり前です」

そういつてにこりと近づいてきたのは、ピンク色のロリータを着た女性。

……いや、メイド服を着た、女性。

ふりふりのレースは裾だけでなく、様々なところに使われており、ワンポイントの花は、巨大だ。

「あなたは这个世界に召喚されたのですよ、保崎さま」

にこりと笑う、彼女にノックアウト。

おかしいなあ……あたしに百合要素は一切なかったはずだけど。

「それで……？ あたしは何のためにここに来たんですか？」

他にも聞きたいことはいっぱいあるが、まずはこれが最優先だ。

すると、メイドさんに代わって、おじさんが、椅子から立ち上がり、大声であたしに言った。

「保崎 秀名。おぬしはこれから、最愛の息子たちのハートをゲットするのだッ！」

……保崎 秀名。なぜか異世界で、逆ハーレムづくりを強制されました……。

第三の問い「ハーレムを作ることができるのか？」（前書き）

予想以上の反響に驚きです><

読んでくださった方、感想と評価をつけていただくと踊ります。画

面の前で^^

第三の問い「ハーレムを作ることができるのか？」

Q、王子のハートをゲットし、ハーレムを作ることができるのか？

A、（一番目の答え）さあ、わかりませんね！

「第一王子のクロード様です」

あたしは今、豪華なあるドアの前に、例のメイドさんと一緒に立っています。

紅い、蛇がモチーフらしいドア。宝石やら金やらがたくさん、これでもかといっている。

「……なんで、こうなったんだっけ……そうだ、数分前だ……」

あたしの、現実逃避から成る回想が、始まった。

「え？　なんで逆ハーレムづくり……？」

思わずつぶやいたけど、それは、おじさんに掴みかかるうとしたレイさんにかき消された。

「なんなんですか、父上っ！　聞いておりませんよ！」

「うん、そりゃそうだよだね。言っていないんだもん」

「言えつつつてんだよバカおやじ！　なんでこんなちんちくりんに恋心抱かなきゃいけないんだよ！」

「そうか？ お前にびつたりだとおも……」

「お前にびつたりだよ！ 四十五のひげおやじになあ！」

いきなりの父と息子のけなしあい……っというかレイさんの一方的な悪口を聞きながら、あたしの頭も混乱。

「えの、あつと、なんであたしを選んだんですか？ 他にもいい人いるじゃないですか。美人さんなんてごろごろいますよ」

「そうだ！ 仮にも美人以外の人でも、こいつのレベルはないだろう、こいつは！」

何故に二度言った！

「ふ。レイは人を見る目がないな。何を隠そうこの秀名さんは！」

お、何々？

「恋愛ゲームの達人なのだ！」

「オタクじゃないですか。ただの」

ふん、あたしはその言葉を何年聞いてきたと思っているのだ！  
もうその言葉には慣れっこだもんねー！

「ただのオタクじゃないぞ！ なんと、この人は恋愛経験ゼロだ！」  
「言うな……っ！」

あたしは、おじさんの顔に右ストレートをお見舞い。

その途端、横にずらーあつと並んだ兵隊さんが、あたしのど元に、長い槍を突きさす。

ほんの数ミリ動いただけで、あたしのどは確実に切り裂けるだ

るう。

「……なんのまねですか……」

「それはこちらのセリフじゃないのか」

ちやつ、と槍を、強く押し付ける。

「王になんてことを」

王？ この人王なの？

「まあまあ、対していたくないから気にしないでくれ」

赤くなつた頬を抑えながら、ニコニコ笑つて言うおじさん。いや、王。

よゆうそんな口調だが、目は涙がたまっていて、痛そうなのが手に取るようにわかる。

「……すみませんでした……」

とりあえず謝っておいて、話の続きに戻る。

「……それで、そのあたしが逆ハ―を作る理由は……？」

「そんなの決まっているだろう！ 息子が恋愛をしたことがないからだ……！」

……何がどう決まっているのかわからない……。

「とにかくだ。女癖悪いやつもいる、妙な趣味を持っているやつもいる、女嫌いの奴もいる、とにかく恋愛に無縁の奴らがそろってい

る」

ええ。特にレイなんか、逆にきらわれそうですよね。

「特定に俺の名前を言っているのは何か意図的なものか……？」  
「そうに決まっているじゃないですか」

バチバチを火花を散らすあたしたちの間に、例のメイドさんが間に入る。

「まあまあ。とにかく、詳しい質問はあとで、長男、そして第一王子のクロード様にあってみませんか？」

回想終了。

短かった……もう少し現実逃避したい……。

「では、入りましょう」

メイドさんが、ドアを開けた。

その先には。

「こんにちは。君が、秀名ちゃんだね？」

あたしのジャージ姿を目にしても驚かない、というか逆の反応をする、長髪の男性がいた。

あたしは、この人の心も手に入れなくちゃいけないのか……。



第四の問い「長男登場に、自信はつくのか？」

Q、長男登場に、自信はつくのか？

A、少し……いや、結構、無理。

「秀名ちゃん、よろしくね。僕は長男、そして第一王子のクロードだよ」

にこりと手を差し出してくるのは、いかにもチャラそうな、男性。百七十はゆうに超えているであろう長身に、甘いマスク。茶色い長髪。

ブラウンを基調とした、例の服を着ている。いい年して、兄弟そろって色違いの服を着ているのにツッコミたくなるが、そこはスルーしておこう。

「では、私はこれで」

頭を下げるメイドさんに、「なりきってるー」と一声かけ、クロードさんは、見送る。

あれ？ あたしは遊び人だと思っていただけ、そうでもないのかも。だって、普通は手ぐらい握るキャラが多いのに。

すると、あたしは今、自分が置かれている状況に頭が追いついた。目の前には、男の人。そして、妙に目が付くのは、フカフカなベツド。

どんなに鈍感キャラでも、さすがにこれは気が付くだろう。その途端、混乱する頭。

いや、待てよ！？ あたしは女だが、ブスでもあるんだぞ！？

自分が一番わかっているじゃないか！ ありえない、うん、ありえない。こいつ、いかにもメンクイそうだし。そうだそうだ、ないない、ないないない。

混乱してきたあたしの方を、ポンとたたたくクロードさん。

「何々？ 俺たち、どうすればいいの？」

「お、お話とかでしょう普通は！ うん、そうですねすよお話ししましょう！」

あたしの熱が入った声に、クロードさんは首をかしげる。

「ベッドで？」

「違うだろぼけーっ！ 初対面の人と話しやすいように椅子というものがあるんだろてめえーっ！ ひと段落飛ばすなバカあーっ！」

落ち着かないあたしの声に、ふっ、と笑うクロードさん。

「椅子、ね。その考えはなかったわー。俺、初対面の人でもゴーだから」

「それはお前だけだーっ！」

ふっ、なんか頭も冷えてきた……よし、落ち着こう私。

ふらふらとおぼつかない足取りで、高価な椅子に近づく。

「お、お話しだね。よし、じゃあやりますか」

にこりと笑う、クロード。

あ、さんつけてないけど、まあいいか。

Q、王子のハートをゲットし、ハーレムを作ることができるのか？

A、この人苦手だから、無理かも……。

「俺の趣味はね」

あたしに質問もしないで、さっさと話し始めるクロード。  
ああ、こいつヤダ……。

「女の子と遊ぶことー」

爆弾投げてやろうか？

とは言わずに、とりあえず笑っておいた。

ひきつりだす顔。

「ん？　なんか顔面崩壊しているけど、大丈夫かな？」

ニコニコと、罪悪感の感じていなさそうな顔で笑う、クロード。  
うっぜええー。

あたしは後ろを向き、思いつきり顔面崩壊　いや、いやな顔を  
して、心の中のいろいろな感情を吐き出した。

「どうかしたの？」

何も疑っていなさそうな、純粹な目。

こいつ、何歳だよ。っていうか、女遊びが趣味なのに、なんでこ  
いつ、こんな顔ができるわけ？

「いえ。失礼しました」

あたしは笑って、背筋を伸ばす。

「ところで、好きなタイプとか、あるんですか？」

あたしが聞くと、

「女の子全面」

と、答えた。

ぶ、ぶっ殺してえーっ。

「女の子って、イイよね。かわいいし、守りたくなるし」

あれ？ こいつって、あたしが思っているのより、いいやつなのかも。

そう思ったとたん、

「特に体」

あたしはクロードに顔面パンチをお見舞いし、部屋を後にした。  
もはや、目的忘れる。

第五の問い「次男登場。恋の予感はあるのか？」（前書き）

拍手ページやらいろいろ設置しました  
クリックお願いします^^

第五の問い「次男登場。恋の予感はあるのか？」

ぷりぷりおこりながら部屋から出てきたあたしを見て、例のメイドが、

「やはり、苦手なタイプでしたか……」

と、苦笑い。

あたしはうん、と激しく同意。

「では、次の部屋に行きましょう。次は次男、第二王子のアシル様です」

アシルかー。いい人だったらいいな。

そんなことを思いながら、一分もたたないうちに、クロードのころの部屋と同じような飾りが付いた、豪華なドアの前についた。

「それでは、行ってらっしゃいませ」

深々とお辞儀をして、あたしを部屋の中までに案内しないようだ。クロードの時と違う扱いに、あたしは疑問を抱く。

「あの、なんで部屋を開けないんですか？」

「わたくしはこの部屋の人　アシル様と、あまりかかわりたくないんです」

かわいらしく、にこりと笑うが、そこに何かただならぬものを感じたあたしは、それ以上の探索をあきらめ、扉を開けた。

「あの……保崎です……」

部屋の奥にいたのは、

「ああ、いらっしやい」

椅子に座った、クロードよりは小柄な男性。

まず目に付くのは、縁なしのメガネ。その奥の瞳は茶色く、瞳と同じ色の髪は、長髪を後ろで三つ編みにしている。おっとり系のよ  
うなオーラで、背後には花が見える。

見た目は大丈夫そうな人だが、油断大敵。警戒せよ。

すると、アシルさんは、すぐに手元の本に目を落とす、第二王子。  
本の題名は「Q、猪瀬でハンバーガーは食べられるのか?」。

「……なんか、どこかで聞いたことがあるような題名ですね……」  
「この本を知っているのかい? 略して『猪瀬ハー』だよ。本好き  
なら、話も弾みそうだね」

いえ、あたしは大体、ラノベ、しかもハーレムものくらいしか読  
みませんから。

と言おうとしたのだが、その隙も与えずに椅子に座るように勧め  
る、アシルさん。

「あ、ありがとうございますー。座らせていただきます」

うん、この人はいい人だ。

にしても、こんなに紳士的なら、何がいけないのかなー……。  
と、思考をしていると、廊下からだだだっという音と、メイドさ  
んの「いけませんッ!」という声がした。

「!?!? なんでしょうか」

さあ、とアシルさんは首をかしげる。

その時、盛大な音を立て、気温は結構低いのに、半分露出しているミニドレスを着た、ケバイ女の人が入ってきた。

その人は、あたしの顔を見ると、たつぷり口紅をつけている唇の端を、ぐ、としたに下げ、

「なんなのこの小娘！」

と、怒鳴った。

「はい？ あたしは保崎 秀名です」

「ホザキい？ 変な名前しやがって。あたしのアシル様に、近づくな、糞アマ！」

……あたし、悪いことなんてしていないと思うんだけどな……。

いや、待てよ。

お母さんの財布からこつそり五百円パクツたのがばれた!?! いや、あの時は五百円だからいいやとか思っていたけど、もはや怨念が異世界まで来ちゃうとは思わなかったよ。

「お母さん、ごめんなさい……お母さんにとって五百円がそんなに重いものだとは思いませんでした……ですから、ちゃんと成仏して

……」

急に語りだしたあたしに、お母さん（らしき人）は、ひくつ、と顔を引きつらせる。

そして、違うわよっ！ と、唾がかかりそうな勢いで怒鳴ってきた。



「あんだ、アシル様を横取りしようとしているのね！？ わかったわ。でも、アシル様は私のもの」

「え？ 待って。君、誰だっけ」

びつきーん。

空気が、張りつめた。

すべてはアシルさんの一言によって……。

「ああ、思い出した。君、街中で、いつも僕に焦げたクッキーをくれる人だね。真心はこもっているけど、正直言って、それなら下級貴族の娘さんたちがいつも売っている、屋台のクッキーのほうがましだな」

すると、その時。

ぱあん。

女の人が、アシルさんの頬に、平手打ち。

「そんなにひどい人だとは思わなかったわ！ もういい、帰ります」

ミニのスカートを翻し、彼女は廊下の奥へと颯爽と消えて行った。

「……あの、大丈夫ですか……？」

口の端を赤くして、頬を抑えているアシルさんに駆け寄り、恐る恐る顔をのぞく。

まさか、この人もクロードみたいな遊び人……？ いや、悪女、  
じゃなくて、悪男？

すると、彼の口から、とんでもない一言が吐き出された。

「どうしたんだろうか……僕は本当のことを言っただけなのに……」

ああそうか。こいつは、悪男じゃない。

天然の、悪男なんだ……。

「天然キャラ、撲滅しろっ！」

あたしはアシルさんに、さっきの人よりも大きく音を立てた平手  
打ちを食らわし、部屋を出た。

Q、次男登場。恋の予感はあるのか？

A、絶対、む・り！

第六の問い「三男は、あいつなんだけど、どうでしょうか？」

「あっちゃー……すみません、突然、意味不明な乱入者を入れてしまつて」

手を振りながら出てきたあたしに、メイドさんは苦笑い。  
どうやら、あの平手打ちの音は、そこまで届いたみたいだ。

「さて、次の部屋に入る前に、着替えてもらえないでしょうか」

小首をかわいらしく傾げ、質問をするメイドさん。

「え？　なんでですか？」

「実は、お伝えしたくはないのですが、次の人物、三男、第三王子は、あなたととても仲の悪い　あの人なんですよね」

その言葉で、ぴつきーんとくる。

中の悪い　つまり、あいつだ。冷血人間キャラ、黒髪の、いやあーなやつ。

「その人が、ジャージで来させるなど、おっしゃっていたので、着替えていただこうかと」

うん、あたしも登場草々で怒鳴られるのはまっぴらごめんだ。  
というわけで、着替えることに。

「ドレスとメイド服。今用意できるのはこれくらいでしたが、どちらがよろしいでしょうか？」

そ、それは究極の選択……。

あたしはどっちも似合わないのは自分が一番わかっているし、着替えてメイクしたら美人さんになる設定なんて、あの作者が作るわけないし。

でも、メイド服で行ったら「ふざけているのか……？」とか言われそうだし。

「じゃあ、ドレスで……」

ああ、ドレスなんて着るの、七五三以来だなあ……。

Q、三男は、あいつなんだけど、どうでしょうか？

A、答えるまでもない。

「失礼しまーす……」

ドレスなんて着たことなかったから、数十分も苦勞して、ようやく三男と会うことに。

そこで待っていたのは、予想どおりあいつだ。

「遅い！ 何やっていたんだ！」

腕時計を見ながら、怒鳴り散らす黒髪のイケメン。  
レイだ。

「あなたのお望み通り、着替えてきたんですー。文句言う筋合いはありませんー」

あたしのやる気のなさそうな答えに、レイはさっそく、

「ふん。お前にドレスなんか、もったいないな。豚の着ぐるみでもよかつたんだぞ？ お似合いで」

悪口。

ふん、そっちがそういうつもりなら、こっちだって言ってるよ。

「あんただって、人のこと言えないんじゃないのー？ あんたのお兄ちゃんたち、あたしが来たら椅子進めてくれたけどー？」

「あいにく、この椅子は繊細でな。お前が乗ったら壊れそうなんだ」

「ああそう。じゃあ、あんたが乗っても壊れるわね」

「ほめ言葉をどうも。こっちは鍛えているんで、お前とは重さの種類が違うんだよ」

「あらそう。じゃあ、一生、その椅子には座らないように気を付けてね」

おほほほ、と口元に手を開け、上品な笑い。

レイも、はっはっは、と、腰に手を当て、寛大な笑い。

ところが、その笑い合戦も、すぐに尽きる。

「おら、表でろやごらあ！ この俺様に何言いまくってんだおらあ！」

「そっちこそ出なさいよ！ このあたしに、何回悪口行ったら気が済むわけ！？」

バチバチと、火花を散らす。

すると、不穏な空気を察したのか、メイドさんが部屋の中に入ってきた。

「レイ様っ！？ 保崎さま！？ おやめください！」

あたしとレイの間に入る。

その途端、レイが「おまえ、ようやるよな」と、不思議な一言を発する。

するとメイドさんは、少し待っていてください、と、黒い笑みとともに言い残し、レイを部屋の隅に連れ込む。

何やらこそそと話し合っているようだ。会話の内容は気になったが、プライバシーの侵害になりそうなので、あたしは椅子に座って待機。

数分後、げっそりしたレイと、生き生きとしたメイドさんが、あたしのもとに来た。

「お待たせいたしました。では、話の続きを」

一礼し、スカートを大きくひるがえし、ほれぼれするような歩き方で部屋を出て行った。

残されたのは、あたしと、魂を吸い取られたかのようなレイだけ。

「……あのー……大丈夫ですか……？」

「ダメだ。誰でもいい、助ける」

そういつて、手を取ってきたレイ。

あたしはいきなりの行動に、悲鳴を上げ、

「変態っ！ 触るなポケっ！」

優雅に平手打ちではなく、得意な右ストレートを食らわして、あたしは、メイドさんのように、部屋を後にした。

にしても、あのメイドさんの正体って……？

第七の問い「四男五男は最悪ですか？」

「メイドさん、あのー……」

あたしは、メイドさんに追いつき、裾を引っ張る。

ふりふりの繊細なレースを引っ張るのは気が引けたが、まあ、仕方がない。

すると、レースが破けるので、と、表情にだし、さりげなくあたしの手を外す。

「なんででしょう？ あ、次は双子なので、四男と五男、一気にいきますよ」

「いや、そういうことじゃなくて。あなたの名前とか、そういうば知らなかったなーって」

あたしが聞くと、にこりと、かわいらしい顔で、答えた。

「これからわかりますよ。」「心配なく」

それだけ言うと、あたしの背中を押した。

目の前には、ドア。

「ひ、開いていないですーっ！」

強い力で押されたので、あたしはドアに激突 しなかった。

ギリギリのところを開き、目の前に、白い腕が広がった。

そのまま、ふわりと誰かに抱きかかえられる。

「はい、捕獲ー」



「え、何やってるの……怖い怖い、ヤダヤダ連れてこないでーっ！」  
捕獲とか言ってる、もはや人間扱いをしてくれない人は、ストレ  
ートの金髪。青い目。  
あたしをみんなの嫌われ者扱いのようにしている、失礼な人はく  
るくるの巻き毛。緑色の目。  
巻き毛さんのほうは、森であった、エンジェル いや、ジェル  
君だ。

じゃあ、もう一人は……？

「初めましてー。ジェルのことは知っているんだよね。僕、ジェルの兄、シエルだよ」

あらー。ジェル君と同じく、かわいいキャラですかー？  
と思ったら、隣にいたジェル君が忠告。

「シエル、かわいいキャラじゃないよ。小悪魔だから」

え？ 何それ。

そう思っていると、ぎゅ、とシエル君が、きつく抱きついてきた。

「わわわ、何々っ！？」

慌てていると、衝撃の一言を繰り出した。

「うん、Cカップかな。まあまあだね。僕の範疇にはないけど」

死ねーっ！

Q、四男五男は最悪ですか？

A、ジェル君は分からないけど、シエル君は女子の敵。死んだほうがいいと思う。というかいつそのこと死ね！

いきなり、みぞおちに強烈なパンチを発動したあたしに、ジェル君はひい、と部屋の隅に逃げる。

「はー、はーっ。死ね死ね死ね死ね……」

あたしは彼の横にしゃがみ、お経を唱える。

その光景を見て、逃げようと確信したらしいジェル君は、壁に沿ってカニ歩きをし、ドアに向かってダツシユ。

あたしはジェル君より、自分の感情を吐き出すことが最優先なので、そちらをちらりと見ただけで、再び作業再開。

「もうやってやれないよーっ！ これだから女の人って苦手なんだーっ！」

泣き叫びながらドアを出ていくジェル君に、キャラ確定。

こいつは女嫌いキャラだ。

「かわいい顔してるのに、なんつー性格だ、この兄弟」

ため息と自分の中にある黒い気持ちを吐き出した時、廊下から悲鳴が聞こえてきた。

「はっ！ あれはジェル君の声！ どうしたのかな。まさか、このお話はミステリーなの！？」

ミステリーは嫌いじゃないあたしが、胸を躍らせて悲鳴の聞こえたところに行くと、ジェル君と、その襟元をつかんで黒い笑みを浮かべているメイドさんがいた。

「あの、何かあったんですか!? まさか、さっ、殺人とか」「いえ。違いますよ。彼はただ、失神しているだけです。さて、連れて行ってあげてください」

そういって、名残惜しそうにジェル君を渡すメイドさん。  
な、何があったんだ……。

「あ、目覚めたときに、悲鳴を上げると思われますが気にしないでください。彼はほんつとつに女性が苦手なんですよ」

おほほほ、と口に手を当てて優雅な笑い方をする。

「そつっばいですよー。わかりました、戻しておきます。

あたしはジェル君を遠慮なく引きずりながら、部屋に戻って行った。

部屋の中には、シエルがうなされながら左右にごろごろつこめいていた。

Q、四男五男は最悪ですか？

A、yes。シエル君に加え、ジェル君も、たぶん最悪です。

「う……」

しばらくしていると、ジェル君の意識が戻ったようだ。

うん、これもあたしがベットに運んでおいたおかげかな。

いいことをした、みたいな顔でジェル君に声をかけると、

「うっわああああっ!?! ベットに運ばれたああああー」

「っ!」

と、世界の終りみたいな叫び声をあげられたので、あたしは、

「死ね糞野郎っ! 女子の何が悪い!」

近くにあった花瓶を投げつけた。

うん、悲鳴は上がったけど、すこし的をそらしてあげたから、心配はない。

## 第八の問い「六男は、まともな人か？」

さて、最後だ。

これで全員との面談が終わる。あとは恋愛ゲーと同じ要領で攻略していけば大丈夫だろ。

にしても、遊び人、天然悪男、冷血人間、小悪魔、女嫌いとそのつたけど、あとは何が来るんだろう……。

は、まさか、ムツツリ！？ ごめん、あたしあれには萌えない体質なんだ。そうだったら、逃げよう。

そんなことを考えている時間、約二十秒。その間、上を見てボーンと突っ立っていたわけだから、メイドさんがあわてて声をかけるのもわかるよ。

でもさ、お願いだから顔をつねって、現実に呼ぼうとしないで……。

「い、いはいですメイドはん」

「痛くないですよ。最後なんですからつきちつとなさってください」

あれ、なんか目の色変わったよね。なんでだろう。

すると、メイドさんが、部屋のドアを開け、中に入って行った。

これまでとは違う行動に、首をかしげる。

そんなことをしていると、メイドさんが早くしてください、と言ってせかすので、慌てて中に入って行った。

「はいはい、入りましたよメイドさん。こんにちは、保崎です……  
…っつて、ええっ!？」

中にいたのは、メイド服を豪快に脱いでいる、メイドさん。

ああ、文章的にも頭的にも混乱を招きそう。

「あのっ！ 何があつたんですか脱がないでくださいメイドさん！  
ああ、六男が悪いことをしたとかそういう感じですね！ わかり  
ました、あたしがぼっこぼこにしてやりますよ。さあ、出てきなさい、女の敵、魔性の六男！」

「あのさあ、うっざいんだけど。さっきから兄様の顔やらみぞおち  
やらを殴っててさ」

声がした。

小鳥のさえずりのように、透き通る、きれいな声。その声は、複雑なつくりのメイド服に苦戦している、あのメイドさんのほうからした。

「…………え…………？」

きょとんとしていると、上半身は脱げたようで、安心したメイドさんが、こちらを向いた。

「僕。僕がその声発してるの。わかる？」

眉をひそめ、どちらかというと睨みつけるような視線を送ってくる。

その人物は、先ほどまで、ロリータといったほうがいい、ふりふりのメイド服を着ていた、メイドさん と、思われていた人物。

「僕が六男。第六王子の、ソウシ。兄さんたちにした分、返してあげるから覚悟しておいてね」

ああ、こいつは、最近人気が出てきたキャラ。  
女装男子キャラだ……。

Q、六男は、まともな人か？

A、まともじゃないです。一番。

「と、言うわけで。しっかり、歯を食いしばってね」

いやいやいや、上に一枚着てください、下半身スカートって異様な光景です。っていうかいつの間にもメイク落としたんですか。って  
いうかなんでそんなにブラコンーっ!？

「失敬な。僕はブラコンなんかじゃない。男の人が好きただけだ！」

堂々と、高らかに宣言したソウシに、あたしは思わず冷たい目を  
向ける。

空気が凍り付いてきたと思うが、そんなこと微塵も気にしていな  
いスイッチが入ったのか、彼は顔を少し赤くし、それでも声のト  
ンを落とさずに演説。

「男の人っていいだろう……あの体！」

あたしは近くのクッションを投げつけた。

それを、少し体を動かし、かわす。

くそう、何て奴だ……！

「あの低い声……特に、クロードがいいと思うよ……」

ああ、こいつは腐っているー！

こいつも逆ハーレムの対象になっっているのがヤダー！ こいつに好かれるなら、全国のムツリさんに好かれた方がマシだー！  
すると、その叫びを、思わず声に出っていたのか、表情に出っていたのかは知らないが、とにかく察知したソウシは、む、と唇を尖らせる。

「なんだよ。ムツリが嫌いとか、贅沢なこと言ってるんじゃないよ」「え、待って、説教モードに入りそう！ やだ！ こいつに説教されるとかマジヤダ！ 幼稚園児にケータイの使い方教わるほうがまだましだー！」

「何言ってるんだよ。そんなことしないって」

机の上に重ねてあったTシャツに手を伸ばし、ソウシはくすりと笑う。

「まあ、今日は夜にレイお兄様と逢引する約束したから、今のぼくの心は広いからしなだけだけどね」

あ、そうか、あの時、レイが死んだような顔していたのはこのせいか。まあ、このホモ具合なら、何されるかわかんないね。

あたしは心の中でだけど、レイに合掌。

無事に、夜を過ごしてくれ。

「とにかく、僕は愛するお兄様 いや、男の人が、君に楽々攻略されるのが嫌なの。僕も逆ハーのメンバーに入っているけど、君には協力しない。いや、むしろ邪魔をする」

その瞳に、黒い光が宿つたのを、あたしは見逃さなかった。

「だから、僕は君に恋なんてしない。いや、できない。だって女だ



もん」

「うわー、なんだか男が言わない言葉ランキングの十位以内には入りそうなお言葉。あ、後半部分だけね。」

「だから、君の逆ハートの計画は失敗に終わるだろうね。ああ、それと忠告。もし、お兄様一人でも君に惚れるなら、君を葬むるのに手段を択ばないからね。覚悟しておいてよ。」

着替え終わったソウシは、あたしをまるで恋敵のように見ている。いや、あたし、あんただけじゃなくて、全員に好かれる自信がないんですけど!?!

「そんなこと言って、本当はバリバリやる気なくせに。やだやだ、女の人ってやだ」

「ああもうウザいなあ。あたしが何か言うことに突っかかってくんのやめてよ! この、女装ホモ男!」

「ああ? 女装はオプシオン。男の人に好かれるための手段!」

「それがキモいって言うてんの! 女嫌いキャラはすでにいるんだし、やめたら? そのキャラ」

「やめるもんかよ。お前こそ自分のキャラはなんなんだよ。言うてみるよ」

「ふん、オタク女子。これで結構コケコッコー」

「古いんだよギャグが!」

「新しいギャグないから仕方ないじゃん!」

数分、そのような低レベルののしり合いをしたのち、ソウシが折れて、部屋を出て行った。

あ、忘れてたわ。恒例のあれ。

あたしは、あの忌々しいソウシの後ろ姿に、助走付きのとび蹴り

をして、その場から逃げだした。

## 第九の問い「攻略はできそうなのか？」

全員の面会が終わったので、最初にいた部屋に戻ったあたしたち。

「俺は、遊びならいいけど、本気の恋愛となるとどうかなあ……？」

「僕は、暴力をふるう女性はちょっと……」

「論外だ、論外。早く帰れ」

「ちよつとサイズ測っただけじゃんか。ケチな女の子は嫌い」

「ボク、女の人が苦手だから……」

「僕も無理。男性しか愛せない、悲しいハートを持っているからね」

あたしの目の前で好き勝手に言いまくる、六人のイケメンたち。

ああ、あたしM属性じゃないからダメです……。言わないで……。

「そもそも、美女だったら行けたと思うよ？　なんで顔を変えさせなかったのさ。性格はそのまま、顔だけ変えることも可能でしょ？」

シエルがもつともな言葉を言う。

「あたしもそう思います！　なんでこの顔なんですか？」

食って掛かると、ふう、と呆れた顔をする王様。

「何を言っているのかね。恋愛ゲームだって、恋する男の子に、『やーいやーい、ブスー』とか言われているだろう」

「それは特殊なものなんです。照れ隠しというか、そんな感じですよ」  
「だって主人公の女の子も、『あたし、不細工だし』とか言っているじゃないか」

「それは行き過ぎた天然なんです！　自分の顔の良さもわからない

天然ちゃんなんです！ そついうのが萌えるんです！」

でも、とまだ言おうとする王様に、あたしは最後の言葉を投げつけた。

「いいですか！？ モテる女の条件は、一に顔、二にスタイル、三に胸なんです！ 性格なんてどこにもありませんよ！？ よつぽど性格がいい人でも、顔がダメだったら恋愛対象から除外されますよ、除外！」

「なにっ！？ ……おつ……っ……」

威力はすごかったのだろう。ショッキングな顔をしている王様が、ふらりとよろける。

「そうだったのか……やはり男は顔なんだな……じゃあ、王妃を顔で選ばなかった私はいったい……」

「そうなんですか、あなた」

思わず口を滑らしてしまった王様に、王妃様がゆらりと近寄る。

王妃様は、そのまま、人類の最期的な悲鳴を上げた王様を引きずりながら、兵隊を引き連れ部屋を出た。

「……かかあ天下……？」

あたしが一番しっくりくると思った単語と口にしたとき、頭に衝撃が。

「ったー……何すんのよー！」

後ろを振り向くと、手をグーの形にした、レイが立っていた。

「何じゃねえだろ、っていうかそれはこっちのセリフだバカ！ 男は顔で決めるだあ？ なめんなよ！ そういう女のほうが男を顔で決めてるんじゃないかねえの？」

「もち」

そっけなく言ったあたしに、レイはもう一度こぶしを振り上げ、そのまま落とす。

がつん、と見事な音がした。

いったー……何すんのよ！

「いいかよく聞け。顔で好きなやつ決めるほど、俺たちはバカじゃねえんだよ」

あ、いい言葉。と、少し感動した時、レイが啖呵を切った。

「俺はお前と真剣に向き合う。だからお前も、真剣に攻略しに来い」

「え……？」

フリーズ。空気が凍り付き、背後に「……。」という文字が浮かぶ。

兄弟たちの冷たい視線を浴びて、しまった、というように口元をふさぐレイ。

だけど、言葉は取り消せません。

「言ったな……？」

きらり、と目を光らせたあたしに、レイは慌てて、手で宙をかき回す。

そんなことしたって、言ったことは消せないもんねー！

「じゃあ、あたしは本気で、お前ら六人、攻略しに行くから、」

びし、と六人を指さす。

シエルに回し蹴りを連発されているレイを見て、少し同情してから、続きを話す。

「覚悟しててよ！ あたしは、異世界で逆ハーレムを作ってやるんだから！」

そこで、あたしの目の前の景色が変わった。

攻略キャラは六人。

遊び人、天然悪男、冷血人間、小悪魔、女嫌い、そしてホモ女装男子。

みんな、あたしに対しての印象は、対象外から、多くて十。

「攻略しまくるからね。覚悟しといてよー……」

それじゃあ、今から本当の、ゲーム・スタート！

「攻略開始っ！」

あたしは、ポカーンとしている彼らを見ずに、部屋から出て行った。

Q、攻略はできそうなのか？

A、今のところは不明だけど、やって見せる！

## 第十の問い「他人の恋を操れるのか？」 前編

攻略するって啖呵切ったけど、いったいどのようにして攻略するのか……。

あたしは、ドレスが汚れるのを気にせずに、腕を組みながら、屋敷の中を探検中。

等間隔で、高そうなツボが置いてあるのに少しムカツとするけど、まあ、歩いたほうが考えやすそうでしょ。

ぽふぽふと足音を立てながら、慣れないヒールで、歩きまくる。

「三人寄れば文殊の知恵というけれども、一人だし、何も浮かばないし」

真っ白な頭を叩きながら、独り言をつぶやく。

しばらく歩いてみると、前からメイドさんが歩いてきた。

白いエプロンドレスに、レースのついたカチューシャ。うん、やっぱりソウシのメイド服は趣味のものだな。にしても、よくあんな格好するよねえ……。

と、そんなことを考えていると、普通にすれ違うと思っていたメイドさんに、がし、と腕をつかまれた。

「はいっ!?!」

「あの、保崎 秀名さんですよね!?!」

ブロンドのツインテールを揺らしながら、切羽詰まった顔であたしに詰め寄ってくる。

「あ、あの、困ります、私いじめとかそういうのは経験したことなくてですねえっ!?!」

「違います、助けてください、あたしの恋を、指南してください！」  
はいっ！？

彼女は、下っ端メイドのミル、というらしい。  
メイドなんて、この屋敷に余るほどいるのに、しかも下っ端で、  
ミルという目立たない名前という、とにかく存在が薄いのが悩みの  
十八歳だ。

「ってあたしより年上ですかっ！？」

「ははは、いいんですよ……あたしなんかチビで、童顔で、胸もな  
くて、性格も悪くて影も薄くてドジばかりしていつも怒鳴られて  
……」

「あーっ、イイです、もうやめてくださいっ！」

あたしがとめると、ミルさんは口を閉ざした。

「あたしが唯一褒められるのは、手先が器用なだけです」

唇をとがらせながら言うミルさんに、あたしは何とかフォロー。

「そんなことないですよ。大人の女性感がしますし、髪もきれいで  
すし、手先が器用なんて乙女っばいし、それから……えーっとなえー  
っとお……」

「もういいです秀名さん。本題に入りますね」



肩を落としたミルさんは、やや投げやりに話を変えた。

「あたしが今こうして秀名さんに声をかけたのは、言った通り、恋を指南してほしいんです。まあ、簡単に言うとコントロールです」

これ、と言ってミルさんが写真を取り出した。

写真には、茶色い馬の上に乗る、銀の甲冑を着た男性が写っている。

「この人は……？」

「あたしの思い人、カロさんです。かつこいいでしょう……？」

何故あたしに意見を求めてくる。まあ、確かにかつこいいとは思  
うが、そこまですば抜けているわけではない。

つまりは、平均レベルだ。

そんなことを考えていると、涙ぐんでいるミルさんに気が付いた。

「やっぱり平均レベルとか思っているんですねーっ！ みんなに言わ  
れるんですよーっ……！」

「え、あと、ミルさんは、なんでカロさんのことを好きになったの  
？」

あたしが聞くと、真っ赤な目で見上げてきた。

「数日前です。あたしは、庭で、親とはぐれた小鳥を発見したんで  
す」

ああ、想像つく……べたなパターンだろ……。

天井を仰いでいると、思い通りの答えが。

「どつしよつかと思っている、カロさんが来て、あとは任せて、  
って言ってくれたんです。それから……」

「あー、あーっ、わあかった、わかった。とにかく？ どうすれば  
いいの？」

「あたし、こんなこともあるつかと、すでにアプローチ済みなんで  
す。あとは告白だけです」

自信満々に言うミルさんに、あたしは、

「まあ、まずは相手がどう思うかだよな」

「え？ 立ち上がって、どうしたんですか？ これから何を……」

「もちろん、ミルさんがカロさんと会って、どんな反応をするのか  
確かめに行くの。まずはそれから始まる」

逢いに行くよ、といったあたしに、ミルさんは赤面しながらも、  
しぶしぶ立ち上がった。

話していた部屋を出て、しばらくすると、レイにあった。

「……うちのメイド引き連れて、何やってるんだ……？」

怪訝そうな顔をしたレイをスルーして、そのまま進む。  
すると、慌ててレイが引っ付いてきた。

「なによ！ あんたに関係ないこと！」

「ある！ なにかされたら、俺が怒られるんだよ！」

「あんたに関係ないって言ってんでしょ？」

あたしが口げんかを始めようと身構えたとき、ミルさんが、イイ  
です来てください、といったので、レイはドヤ顔。

うっぜええ……。

「来てもいいけど、邪魔しないでよ?」

「だから、何をするんだ?」

「し・ご・と!」

Q、他人の恋を操れるのか?

A、絶対に成功させてみせる!

第十の問い「他人の恋を操れるのか？」 中編

「うん、あれがカロさんだね。よし、じゃあ行って来い！」

少し歩いたところにある乗馬場で、カロさんを見つけたあたしは、乱暴にミルさんの背中を押す。

「わあっ!?!」

背中を押され、バランスを崩したミルさんは、どて、と顔から着地。

どしん、といい音が響く。

その途端、優雅な馬たちが一斉に鳴き始める。

「ど、どうしたんだ……? あ、ミルさん」

よつやくミルさんを見つけたカロさんは、茶色い馬から飛び降り、駆け足で駆け寄る。

「どうなんだ? 今のところ脈ありか？」

ここに来るまでに事情を説明しておいたので、レイがあたしに聞いてくる。

「ああもう、うるさいよ。黙ってて」

耳をふさいだあたしは、二人に神経を集中する。

ミルさんの前にはコマンド。『「ありがとう」』、『「大丈夫だから」』、『何も言わずに手を取る』。

うん、ここは無難にありがとうだろ。相手のキャラも不明だから。あたしは口パクで、ミルさんに伝える。すると、伝わったんだかどうかわからないが、ありがとう、と笑っていった。

「ナイス笑顔っ！」

「……お前、つくづく変なやつだな……」

怪しいものを見る目で、レイがあたしを見てくる。

「なんでよ」

「だってそうだろ。他人の恋なんか、ほっときゃいいのに」

あのねえ、と言いつ返そうと思って、口を開けたが、あたしの言葉の前に、カロさんの言葉。

「よかった。大したことがなくて」

「はえっ！？ ひゃ、ひゃ……」

返す言葉が見つからなかったのか、ひゃ、を連発するミルさん。にしても、あたしのカンに狂いがなければ、告白してもいけそうな気がするんだけどな……。

そう思って、あたしは手でミルさんと呼ぶ。

「はい？ なんですか？ あ、もうダメダメとか！？ そ、そりゃあ緊張して嘔んじゃいますよー！」

「そうじゃなくて。行けんじゃない？ 告白しても」

すると、ミルさんの顔が真っ赤になった。

「こ、ここここ、告白う！？ いやいやいや、そんなあたしは無理です！」

「え？ なんでここまで来て嫌がる。もともとそれが目的だったんでしょ？」

「それでも心の準備があるということですよ！」

「あ、じゃあこつすればいいんじゃないか？」

急に口を挟んできたレイに、ミルさんはひゃあ、と悲鳴を上げる。  
な、なぜに悲鳴……？

「あの、いくら王子とはいえ、プライベートに首を突っ込まないで頂けたく……」

「違う。ほら、明日は創立祭だろ？」

「あ、そういえばそうですね」

まった、待った！ 創立祭って何よ！

「創立祭とは、この国ができた日にちを祝う日なんです。屋台がいつぱい出て、お祭り騒ぎで騒ぐんです」

「その時、男女が好きな相手に花を贈り合うイベントがあるんだけどな……」

あ、その時に告白ってことね。まあ、お祭りだからいいと思う。

そう意見を出したあたしに、ミルさんは、え、でも、とまだいう。

「もう！ いいでしょ明日で！ この国が創立した日と、あんたたちの仲が創立した日、一緒に！ 嬉しいでしょ、そうでしょう！？」

有無を言わせぬあたしの声に、こくこくうなづくミルさん。

「よし、それじゃあ決行だな。明日の朝に、私服で俺の部屋の前に集まれ。作戦会議するぞ」

「うん、そうだね。でも、その前に」

あたしはまた、ミルさんの背中を押す。

「創立祭に誘って来い！」

「あ、それがあったか」

「きゃあああーっ！？」

Q、他人の恋を操れるのか？

A、うーん、ゲームならできただけど、わかんない。

「あの、着てきました、私服……」

そういつてくるミルさんは、健康的な足を出した、ミニスカートの姿。

上は、ハートのワンポイントが付いたTシャツに、薄手のカーデイガンを羽織っている。

ほう、私服はあたしの世界と一緒になのか。

「まあ、いいほうだと思うぞ。……むしろ、問題はおまえだろ……」

レイは、肩のところには赤いラインが入った、いつものジャージを着ているあたしを見て、唸る。

「え？ だってあたし、参加しないんだしいいじゃん？ 遠隔操作

するよ。トランシーバーみたいの、無いの？」

ザ・引きこもり発言をしたあたしに、レイはひじ打ちを食らわす。  
うぐっっ……………。

「おいメイド、こいつの服も用意してやれ……………サイズは同じくらいだろ……………」

「か、かしこまりました……………」

こ、こんなん、ミルさんの恋、叶うのか……………？

「叶うだろ」

ミルさんが出て行ったあとで、ポツリ、とレイが言う。

「と、言うか、お前が叶えるんだろ」

ニコリ、と、今までに見たことのない笑顔を見せる。  
こいつ、笑うといい顔じゃないか……………。

「……………なんだよ、人の顔じつと見て……………」  
「なんでもなーい。もうそろそろ、ミルさん来るんじゃない？」

あたしは、頭の後ろで手を組み、投げやりに言った。

ま、今はこいつの攻略より、ミルさんの恋だよ！



第十の問い「他人の恋を操れるのか？」 後編

「ごめんね、待った？」

ナチュラルなポロシャツに、深緑色のカーゴパンツ。いかにも私服、といった格好をしたカロさんが、待ち合わせ場所に現れた。

うん、服装はまあまあね。あんまり気合入れてないみたい。かといつて、手抜きそうでもないし……どんな心でここに来たのか、読み取れない。

「ま、待ってないです、ないです！ というかあたしが早かっただけー！」

時計を確認すると、待ち合わせ時間ぴったり五分前。  
カロさんのキャラが読めない……。

「そうなんだ。何時に来たの？」

「い、今来ました！」

嘘つけ……待ち合わせ時間の三十分前には来たたる……でも、そんな乙女心、かわいい！

「……お前、さっきからぶつぶつ何言ってるんだ……？ せっかく服で磨かれたのに、そんな行動じゃ、意味ないぞ……」

パステルカラーのワンピースに、レギンスというあたしのスタイルに、妙な表情をしたレイが、ツッコむ。

そんな彼は、目印ともいえる、冬の夜空のような黒髪を茶色く染め、さらにはメガネをかけた、変装っぷりだ。

一応王子だということは隠せているようだが、やはりその顔立ちの良さで一気に黄色い歓声が。

近くの女の子の集団が、「あの女の子、彼女かな?」「えー、違うでしょ、兄妹何かだよ」「やっぱー? 釣り合わないよねー」という会話をしながら、あたしの横を通り過ぎる。

「……レイってさ、何歳?」

「十八だが?」

二歳差か。うん、そりゃあ、兄妹に見えるわな。

じゃなくて!!

いいのかあたし、あんなうっさい性格した奴らに、ブスとかなんだとか言われて!

「ブスは言われていないだろう……」

「言われてるの! あたし的には! ああもう、服だけがかわいすぎて、釣り合わない……あんとじゃなくて、服との相性だからね」

「それくらい言われなくてもわかるわ! ほら、あいつらが移動するぞ。追え」

あたしの手を引っ張りそういうレイ。

ああ、こういう少女漫画的尾行、好きじゃない……ってか、似合わない……。

「あれ食べたいです!」「あそこに行きましょう!」「あれはなんですか?」「ほら、カロさん、早く早く!」

ダメだー！ーっ！！！！

あたしは、お出かけ開始から一時間たったとき、とうとうミルさんを呼び出した。

「あなた、やる気あんの？」

明らかにガラの悪そうな声を出す。

すると、ミルさんは、はっ、となにかを思い出し、

「あ、今日はあたしの恋を叶えるために来たんですね！」

「やる気ないでしょ。あたし、人ごみ苦手だし、帰ろうか？」

そういつて元来た道を歩こうとするあたしの手を、ミルさんが引っ張る。

「あああああっ！ すみませんすみません！ お願いです、帰らないでくださいっ！ ちゃんとやりますからあーっ！」

泣きながら頼んだ彼女に、あたしはさすがに情がわき、戻る。

「ほっ……それで、具体的にどうすれば……」

「そういつと思っつて、応募してきたぞ」

いいことをした、とでもいうように、レイがドヤ顔で、白いステージを指さす。

そこには赤い、大きな蝶ネクタイをした男性と、長机に座っている男女、合わせて数名。

その中でも最も目立つのは、中央に置かれた台と、その上に載った人。

何をするのかと思っていると、急に台の上の人がすう、と大きく息を吸い込み、

「バカ野郎——————っ!!!!!!!!!!」

思いつきり、叫んだ。

きーん、左側の耳から音が入り込み、右の耳から出ていく感じがする。

「っ……これに、参加するんですかっ!?!」

「そっくに決まっているだろっ」

腕を組み、平然としているレイ。

うん、そのアイデアはいい。

「えっ!?! 秀名さんまで……」

「でも、言葉はあたしが考えさせてもらっ。これでいい? 最後はあたしに決めさせてよ」

ウインクをしたあたしに、不安そっくに涙目なミルさんは、こくりとうなずいた。

『さて次は、かわいらしい十代の女の子が挑戦だ! ミルさんっ!』

司会者の方が名前を呼び、おどおどしたミルさんが、舞台袖から出てくる。

ポケットに突っ込んだ手は、あたしが用意したあれが入っているのだろう。

そんなミルさんだが、台の上にと覚悟が決まったのだろうか、観客の席にいるカロさんを少し見て、大きく息を吸い込む。

そして、

「あたしは、カロさんが、好きですっ！」

今までのエントリー者よりも小さいが、彼女の精いっぱいの方が響く。

その途端、観客がざわつき、観客にいる「カロさん」を探す。

「ずっと、ではないですが、やさしいあなたに、心が奪われましたっ！ これ、受け取ってください！」

そういつてミルさんが、カロさんに、あれを投げる。

「え？」

とつさに受け取ったカロさんは、不思議そうな声を出す。手の中には、小さな、一輪のコスモスが収まっていた。

「あたしの大好きな花ですっ！ 受け取ってください！」

震える声を出して、しゃがみこむミルさんに、カロさんは、ふ、と笑った。

「これ」

ステージに上がってきて、カロさんが何かを渡す。

それは、ヒマワリの飾りが付いたピン止めだった。

「これなら例のイベントの一種だと気づかれないかなーって思って用意しておいたんだけど、堂々と言っよ」

顔を上げたミルさんは、真っ赤になっている。

「好きです。付き合ってください」

その途端、ミルさんがうなずくのと同時に、わっ、と歓声が上がった。

Q、他人の恋は操れるのか？

A、あたしが出なくても、大丈夫だったと思うんだけどな……。

「いやー、いいことしたわー」

「何言ってるんだ、お前、告白の言葉考えただけだろ」

「それでも重要な。あ、おいしそうな肉！」

「肉ってなあ……」

あきれたレイと一緒に、あたしは夕日が照らす煉瓦の道を歩いています。

両想いになった二人は、ほおっておこう。リア充は敵。

「まあ、イイか。そういえば、これ！」

レイがそっけなく投げたのは、少ししおれ気味のタンポポだった。

「お前にはこれが一番お似合いだよ！」

なんかいいこと言われている気がする……。  
まあいいか。受け取っておこう。

「ありがとう！」

第十の問い「他人の恋を操れるのか？」 後編（後書き）

告白シーン、書くのが恥ずかしかったです><  
こんなんで恋愛かけるのか……？ 私……^^；



第十一の問い「楽しいディナーになりそうか？」

「兄様と一緒に祭に行ったとか、死ね糞野郎！ ippそのこと地獄に落としてやるよ！」

屋敷に戻ると、玄関のところで、敵意丸出しなソウシがうなっています。

「にしても、恋を叶えた、とかいいこと言っているけど、実際のところ、二人とも両想いだったんだからその噂デマだよね！？ はいそのたつかぁーい鼻ひっこめろー」

あたしの鼻の上をちょんちょんと突つつくソウシ。  
ちよっ、くすぐったいんだけど！

「でも、兄さんも兄さんだよ。なんでこんな糞尼と一緒に出掛けようとか思ったのさ。僕のほうが断然かわいいのに」

体をくねらせながら近づいてくる弟を、変態うっとおしそくに手で払う兄。  
レイ

彼……というか彼女？ は、露出度高めのチュニックに、クリーム色のムートンブーツ。

もはや自分の性別忘れてるよね、あんた。

「ふん。かわいいからいいんだよ。あんたは根性ごと腐ってるよね」  
「見た目から性格まで腐ってるあんたに言われたくないんだけど」

ぱちぱちと火花を散らすあたしたちに、レイが静止に入る。

「おら、いい加減にしるよ。保崎は早く部屋に戻ってる。ソウシは」

「今夜のレスチャーでもしてあげましようか、お兄様」

「断じて断る！ お前は男の服を着て、部屋に戻れ！」

えー、と文句を言うソウシを無理やり引っ張って、レイが廊下の向こうに消えて行った。

「……たく、仲がいいんだか悪いんだか。よくわからない……」

一人残ったあたしは、ポツリとつぶやいてみる。

うん、さみしい・むなしいのコンボだ。

「誰かいらないかなー」

「呼んだ？」

「呼んでない、遊び人」

さつきからいたとしか思えないほどの速さで、クロードが廊下の陰から出てくる。

「ほら、もう日が暮れてきたから、僕の部屋にでもおいでよ」

「意味わかりません。あたしは部屋に戻ります」

「それって、迎えに来てって誘ってるの？」

「違うーっ！」

ぶん、と腕を振りまわり、振り切る。

わざと足音を立てて去っていくが、ととととと、捨て犬の目で見ている。

しばらくシカトしていたが、ついに堪忍袋の緒が切れた。

「さっさと自分の部屋に戻れ、ばかー！」

「え、これからディナーだよ？　そのために君を探してたんじゃないか」

「だったら早く、言えっ！」

あたしは忌々しいクロードの足を踏みつける。

「ごめんね、僕、結構M気もあるんだ」

「死ね、糞っ！」

とは言わず、表情にだけとどめておく。

「うん、それじゃあ一緒にディナーに行こうか。席は隣に座りたいなあ。あ、秀名ちゃん、成人してる？」

さまざまな質問を繰り返してくるクロードに、あたしはもう一度、顔面パンチを食らわし、すたすたと、ディナーの会場に入って行った。

Q、楽しいディナーになりそうか？

A、いやー、無理っしょ。あの面子なら。

「それでは、いただきまーす！」

目の前の皿には、肉、肉、肉うっつ！

「これ、本当に全部いいんですか!?!」

「ああ、食べ食べ。まだまだあるぞ」

遠慮なくいただくあたしに、隣に座ったレイが、不安そうに眉をひそめる。

「お前、せつかくのドレス、汚すなよ」

心配なところはそこかい。

確かに、このオレンジのミニドレス、高そうだけれども……。

「さあ、成人したヤツは飲め」

「お父様、成人したものなど、僕たちの中に一人しかいませんが」

灰色の背広を着たシエルが、呆れ顔で言う。

なんだ、成人した人、一人しかいないんだ。

「うん。僕たち、クロード兄さんが二十歳<sup>はたち</sup>、アシル兄さんが十九、

レイ兄さんが十八、僕とジェルが十五、ソウシが十四だから」

「へー。結構歳、同じなんだね」

「そう。それで、秀名が十六でしょ？ ソウシと二歳離れてるねー」

な、なんでここでソウシの名前を出す……？

すると、今までサラダを黙々と食べ続けていたソウシが、ぴく、と肩を震わせる。

「シエルお兄様、なぜ、僕の名前をお出ししたのですか……？」

「そりゃあ、そしたら面白くなるからに決まってるじゃん」

「お兄様、今晚、お部屋に遊びに行きますね？」

黒い笑みを浮かべたソウシが、席を立つ。

何故、みんな、彼が、ピンクのマーメイドドレスを着ているのに  
ツッコまないのだろうか……。

まあ、それは置いておいて（よくないが）、一人席を立ち、しかもシエルが硬直している空気の中、楽しいお食事会、というわけにはいかなかった。

みな、黙々とコース料理を食べ続け、あたりからは食器が当たる音しか聞こえない。

そんな空気に耐えきれなくなったあたしが、こそりと部屋を出た。

第十二の問い「ソウシとは仲良くなれるっばいか……？」

「なんであんたがいるんだよ」

「こっちのセリフだ、バカ」

なぜか、星空がよく見えるテラスで、あたしとソウシはばったりと会いました。

いやー、本当は靴のつま先が出口に向かっているんだけどね。まあ、こいつも逆ハーの対象だし、この機会に奴と親睦を深めておこうではないか！

「えーっと、そういえば、ソウシって、なんで男の人が好きなの？」

あたしがこわごわ聞くと、ソウシは少し怒っているのか、声を荒げながら答えた。

「君が男の人を好きなる理由と同じだよ」

「え……？ あたし、恋愛はあまり好きじゃないなあ……っていうか、恋愛って、したことないし」

そういうと、ソウシが信じられない、という風に目を大きく見開いた。

な、何か文句あるの！？

「意外だね。疎い女子キャラとかマジでうざい！ とか言いそうなのに」

「あたしは疎くないの。ただ興味が無いだけ。機会がないっていうのもあるし、ゲームの中のほうが、よっぽと安心してできるじゃない？ だから、リアルでは避けて通ってきた道というか……そんな

とっさ」

くるりとつま先の位置をソウシに向け、あたしはあいつの上を広がっている、ピカピカと光る星空を見ながら答える。

ああ、きれいな夜空だ……。

あたしがじつと上を見ていると、いきなり噴出したソウシ。

「……ぷっ……！ あんたに星空とか、似合わねー」

「失礼にもほどがあるわよ！ あんたねえ！ 女装していなかったら、もっといい絵になってたのに」

「え、ということは、今でも絵になってるってこと？」

ぴら、とピンクのマーメイドドレスの裾を持ち上げ、にこりと笑う。

あ、あたしはないと思うっ！

「正直になりなつて。ま、僕は男性以外はこの瞳に入つてこないんだけどね。不思議と。だから君も僕の視界には入っていないよ」

あたしを指さし、くすくす笑いながら言つソウシに、あたしは回し蹴りをする。

しかし、奴はギリギリのところじゃがみ、代わりにあたしの足を払う。

盛大にしりもちをつくあたし……。

「なんだ、弱いな」

「本物と偽物の違いがよおーくわかつただろ。本物はか弱いんだよ」

「え？ 自分、偽物つて認めちゃった？」

「どう考えてもお前が偽物だろ、この変態ホモ女装男子！」

Q、ソウシとは仲良くなれるっばいか……？

A、うーん、まず意欲を持たなきゃね……。

口論を始めてから約三分の間に、あたしたちはいろいろと罵り合った。

「だいたいね、女装の恰好がいくらかわいいからって、男が釣れるとか思ってたんじゃないわよ！」「釣れるよ。僕は、君よりかわいい自信がすごくあるんだけど？」「可愛くっても中身は男だろ！性転換してからそういうセリフ吐けよ！」「いいさ性転換してやるよ。異世界にトリップして性転換してやるよ」「どどういう目的でお前が召喚されるわけ？」「お前みたいに？ 逆ハー作れって」「無理に決まってるでしょ！ 性別の時点で無理！」「いやあ？ わかんないよ。だって、性転換したら中身女の子だし？」

他にも色々と言い合っていたが、すべて書くとは貴重な行がつぶれてしまうので、ここらへんにしておこう……。

とにかく、あたしと罵り合いをしていたソウシに、運悪く見つかったしまったのは、

「あつ！ ジエル兄様！ デイナーはいかがでしたか？」

くるくるの巻き毛が目立つ、ジエル君。

女の人が苦手なジエル君は、壮絶な罵り合いをしていたあたしたちを、好奇心で観察していたが、見つかってしまったらしい。

「あの、僕に関係なくお二人は修羅場をしてくださ……！」



「ジェル兄様。今夜のお約束、忘れていませんよね……?」

上目づかいで聞くソウシに、涙目だが何とか反論したジェル君。

「わ、忘れました、そんな約束!」

「では、今から行きましょう、お部屋に」

ぐいぐいと引っ張るソウシ。

見た目こそ女の人だが、腕力は男だ。か弱いジェル君は、かわい  
そうに、ソウシに連れ去られてしまった。

「頑張つて、ジェル君……」

彼らの背中と、ジェル君の「助けてーっ!」という悲鳴を聞きな  
がら、あたしは同情の目を向け、合掌した。

無事に、今日を乗り切ってほしい……。

### 第十三の問い「弱みを握ってみようと思うのだが」

「はーあ……。なんか疲れた……」

肩を落としながら、あたしは廊下を歩いています……。  
どうも、ソウシといると疲れてしまっ……。。

「こんな時こそ、一人、ラノベを読むんだ！」

ぐ、拳を作って、さっそく近くのメイドさんに、本が読めるとい  
ろはないのか聞く。  
すると、

「それなら、図書館に行つてはいかがですか？」

と、図書館っ!?

図書館なんてものが屋敷の中にあるのか!? どういうことだ!  
少しシヨッキングなあたしを残し、メイドさんは足早に去って行  
った。

「よし、向かおう」

声に出していったはいいモノの……。

「どこにあるのか聞いてねえーっ！」

うん、バカをしました……。

とりあえずほかのメイドさんに場所を聞いて、あたしは図書館の扉を開けた。

すぐに、ほこりと、古い本のおいが鼻を衝く。

「うぐっ……絶対、ラノベとかなさそうなおい……」

帰ろうかなあ、と思っていると、上から声がした。

「どうしたの？ 読書？」

不思議に思い上を向くと、上のほうの本を取る用だろうか、梯子に、足を組んで座っている、アシルの姿があった。

「……あたしが読書をするの、そんなに変ですか？」

「そうだね、かなり変だと思っよ」

ぐさあっ！

アシルの言葉が突き刺さる。

「……で？ どの本を読みに来たの？」

悪気のなさそうな顔に、あたしは奴をにらみつける。

この、天然の悪男がっ！

「ラノベです。ありますか？」

「……らのへ……？」

ひらがなの発音で不思議そうに聞き返す、アシル。

「この世界にはないんですか？」

「ないねえ。らのべって、いったい何の本？」

首をかしげるアシルに、あたしは語りまくった。

ラノベのいいところをつ！

「ラノベとはですね、ライトノベルの略なんです。主に中学生から高校生に向けて作られている本で、まあ今となっちゃ年齢なんて関係ないんですけどね。挿絵は漫画やアニメ風のイラストで、結構ツボなんですよ、これが。もともとは「ジユヴナイル」みたいな名前だったんですが……って、聞いていますか？」

腕を組み、顔を下げ、コックリコックリしているアシルに、あたしは質問。

「……………え？ ああ、聞いているよ聞いているよ」

ニコニコ愛想笑いを浮かべるアシル。

「……………聞いていないでしょう……ところで、その本はなんですか？」

あたしは、彼が持っている水色の本を指さし、聞いてみた。

「ああ、これ？ 前にも言った本だよ。『Q、猪瀬でハンバーガーは食べれるのか？』だよ。読んでみる？」

フルフルと、首を振って拒否。

「残念だよ。じゃあ、好みの本を探してね」

そういつて、読書に戻ってしまったアシル。  
う、なんかこれはこれでさみしい……。  
うん、本以外の話題を出してみよう。  
そうだなあ、何がいいかな。

「あ、そういえば、アシルさんつて、好きな人とか、いないんですか？ いなかったら、タイプとか……」

ぶっ！

勢いよく噴出したアシル。

え、何その反応！

「げほ、げほ、げほっ！」

「いるんですね。誰ですか、誰ですか？」

「いない！」

うそでしょ、とはやし立てたあたしに、彼は手元にあつた辞書サ  
イズの本を落としてくる。

え、痛そうだよそれはダメ！

すれすれのところですよける。

「で、どうなんですか？」

今度は真剣に聞いたあたしに、コホン、とせき込むアシルさん。  
うん、何かありそうだ！

Q、弱みを握ってみようと思うのだが。

A、 イイよ良いよ！ こいつの弱みは、好きな人だっ！

第十四の問い」どのような夜をお過ごしですか？」

「ないよ、ない。そもそも、いたら自己宣告して、このくだらない、お父様による恋愛ゲームから一抜けさせてもらおうし」

もっともな正論だけど、あたしにはまだ潰け込む余地がある。

「……周囲に反対されそうな恋なんですか」

その途端、アシルはひきつった顔で、あたしに笑いかけた。

「何を言っているのかな、保崎さん」

「うーん、そうだと思っんですけど。違っんですか？」

「ち、違っといわれたら……反論できない自分があるね……」

認めた。

少し違っ気がするが、認めたと同じ事だろう。

「どんな方なんですか？」

もう後に戻れないと思ったであろう、アシルはしゅしゅ口を開いた。

「メイドだよ。元、下級貴族の」

「メイドさんかー。ずばり、手ごたえはあるんですか？」

「てっ、手ごたえっ！？ わ、わからないよそんなこと！」

顔を赤くし、照れるアシル。

そんな乙女顔、しなくていい！

まあ、あたしならその恋、叶えてあげられる自信がある。でもそんなことしても意味ないしな……面白いだけで。そう思っていると、アシルがピシ、と人差し指を立てた。

「そつだ。等価交換をしないか？」

「等価交換？」

「うん。僕は、両想いになりたい。好きあつていれば、お父様もさすがに許すと思うし。で、君は、早く元の世界に戻りたい」

梯子を優雅におりながら提案する、アシル。

「僕が両想いになれば、君は僕をハーレムの対象にしなくてもいいし、僕自身も利益がある。どう？ いい案だと思うけど？」

地に足を付けたアシルは、にまりと、ドヤ顔。

「どつする？」

最後に言われ、あたしはうなずいた。有無を言わせない声だったしな。

「じゃあ、取引成立！。明日、朝に、僕の部屋集合ね」

一礼をして、部屋から出て行った。

にしても、こいつの好きな女の人って、どんな人なんだろう。楽しみー！

「おやーっ……」



あたしはその声で目が覚めた。  
時計を見るとまだ夜の一時。ったく、なんの悲鳴だよ、殺人事件でも起きているのかよ。

枕に顔を押し付けながら、しばらく考えていたけど、あれは多分レイの声だ。ソウシに何をさせられてるんやら……。  
答えが出て、よけいにすっきりした頭。これでは、当分寝れないだろう。悲鳴はまだ続いているし。

「廊下に出るかー……」

ゆったりとしたパジャマ姿のあたしは、手元にあった懐中電灯を手にとって、部屋のドアを開けた。

「わー……暗いー……こわー……くなんかないぞ」

悲鳴のよく聞こえる暗い廊下は、まるでホラー映画のワンシーンだ。

その中で、一人たたずむ女の人……うん、何かでそう。

「あーヤダヤダ。夜風に当たって、早く戻ろう……」

そういって、自分を元気づけ、一步踏み出そうとしたとき

「何かお探ですかあー……」

とん、と肩をたたかれた。

硬直しそうになる首に必死で鞭を打ち、あたしは後ろを振り向いた。

そこには、長い黒髪を無造作に伸ばした、メイドさんの姿。

「き、きやあああああつ!!!!」

長い夜は、まだまだ続きます。

Q、どのような夜をお過ごしですか？

A、幽霊っ！ 幽霊が出ましたああつ!!!

第十五の問い「意中の人は、誰ですか？」

「保崎さんっ！？ どうした」

近くのドアから、心配そうなアシルがひょっこりと出てくる。

あたしは後ろに立っているメイドさん いや、幽霊を指さし、酸欠状態の金魚のように口をパクパクとさせ、アシルに助けを求めらる。

すると、なぜかホツとした表情になるアシル。

「……………ランドさん……………夜は危ないと、言っているでしょう……………」

「いえ、しかしランドは、ご主人様マスターから命令を受けておりますので」

にこやかに話す二人。知り合いらしい。

「あのおつ、ランドさん……………ですよ？ 誰なんですか？」

すると、ランドさんは黒髪をバサツと振りながら、こちらを振り向いた。

「このメイドです。ランドは物心ついたときからこの屋敷にお世話になってます」

機械のような口調で淡々と話すランドさん。よく見ると、顔はすごく整っている。

半分しか開いていないと思われる瞳に、薄い唇。白目の肌は、闇を反射している。パーツごとに描いていくと、病人みたいな感じだけど、おかれている位置は絶妙なバランス。

「あなたは　　確か、『乙女ゲーオタクの変人』さんですね」

ぴきっ。

うん、確かに顔はひきつった。

「だ、誰からそんなあだ名を教え込まれたんですか……？」  
「レイ様です」

あんの、性悪男ーっ！

「ランドは、レイの専属メイドだからね」

「あの人は、嫌いです」

ランドさんは、アシルの言葉を遮るように答えた。

「性格が悪いのです。ランドのことを何度も何度も足蹴りにしやがって、ランドがにんじん嫌いなものを知っているくせに、ランチに、にんじんのソテーとか出してきやがるのです。その割に、自分が嫌いな魚をランチに出させなくしているのです」

今までは機械のように単語として出てきた言葉だけど、レイの悪口を言っているときは、なぜか生き生きとしている　　、気がする。

「というわけで、今、レイ様が発しているこの悲鳴ですが、ランドにとってはざまあ見やがれこの野郎程度にしか思わず、助けるそぶりさえ見せないのです」

「あ、そうですか……」

何故、後半説明するような口調だったのだろう……？

「ところで、アシル様、保崎様。お部屋に戻ってはいかがでしょう」  
首を九十度に曲げ、ロボットののような恰好で聞く、ランドさん。  
その時、一瞬、アシルがさみしそうな顔をしたのを、あたしは見逃さなかった。

「そうだね。早く寝ることにするよ。ランドさんも、あまり遅くまで徘徊しないでね。危険だから」

「ランドはレイ様の悲鳴が途切れるまで徘徊しています。お屋敷の中ですし、あまり危険はありません。ですので、早くお戻りください」

はいはい、と生返事をして、アシルはあたしの首根っこをつかみ、ランドさんと離れた。

「……………ところで、アシルさん」

「何かな」

「あなたの好きな人って、ランドさんですか？」

ば。

あたしの首根っこをつつかんでいた手が急に離れ、バランスを崩したあたしは、しりもちをついた。

「そ、そのことに関しては明日、明日っ、説明するよ。じゃあねっ」

明らかに動揺しながら、アシルは近くの扉に入って行った。

「そこ、女子トイレなんだけどな……」

あたしのつぶやきは、二つの悲鳴にかき消された。

Q、意中の人は、誰ですか？

A、ランドさんだと思うよ。 たぶん。

すっかり夜も明けて  
次の日。

あたしは、パジャマ姿のまま、アシルの部屋をノックした。

「はいはい」

寝起き直後のような声がして、アシルが出てくる。

「えっと、さっそくですが、意中の人って、ランドさんですよねっ  
」！

「本当にいきなりだね……答えは、yes、かな……」

うーん、あの人を攻略するのか、難易度がすごいな……。

第十六の問い「攻略方法は、あるのか？」

「と、言うわけで、『ランドさんの好みを探ってみよう！』の会、『第一回目の会議を始めます！』」

あたしの持つてきた黒板を呆れた顔で見ながら、アシルが手を上げる。

「質問です。そのとんでもないセンスの名前を何とかしてもらえないでしょうか……うぐっ!？」

「そんな質問は受け付けません」

額に飛んできた黄色いチヨークを拾い上げ、アシルが涙声で反論しようとしたが、あたしがチヨークを構えたので、黙り込んだ。

「で？ 意中の人の好きなものとか、知らないの？」

「知らないよ。無防備にそんなこと聞いて、僕が好意を持っていると気づかれたらダメじゃないか」

「なんで？」

「メイドとの恋は、あまり普及されていないからね。むしろ、メイドのほうは遺産目当てだと思われがちだから、反対されるに決まっているし、最低、メイドは屋敷から出されるだろうね。それは阻止したい」

真剣な瞳のアシルに、あたしはくすりと笑う。

「……………っ、な、何!？」

驚いた表情をする。

「いや、本当に本気なんだな、って。いいね、そういう恋。あたしもしてみたいなー、って」

そんな一言に、頭を撫でて返事をしたアシル。

「ハーレムの対象の中から、好きな人を見つけてみたら？」  
「無理です!」

がば、と頭を上げたあたしに、びっくりしたのか、後退するアシル。

「あんな奴ら、友達でも無理ですよ。って、話を戻しましょう!」  
とにかく、ランドさんの好きなものを探りましょう!」

慌てながらこぶしを上げたあたしに、やさしく微笑むアシルさんであった……。

Q、攻略方法はあるのか？

A、うーん、見つけてみたい!

「ラルー!」

「あ、いいところにいました保崎さん。かくまってください。ランドは今、追いかけているのです」

とりあえずランドさんのところに行こうと思って部屋を出たあたしは、スカートをつつとうしそくにしながら走る彼女に出会った。



「ラルー？」

「ランドの別の略し方です。ランドの名前は、ラルドイドですので。とにかく、この部屋に入れさせてください」

答えを待たずに素早く入ってしまったランドさん。

「って、そこ、アシルさんの部屋ですけどっ!？」

あたしは止めるが、鬼の形相で追いかけてくるおばあさんメイドをドアの向こうで見つけ、無理です、とでもいう風に指でバツテンを作る。

仕方がないので、あたしもすばやく部屋に入る。

そこには、顔を少し赤くしながらも、冷静を装っているアシルさんがいた。

「な、なんでここに!?! どうしたんですか!?!」

「昨日の鬱憤を他人に八つ当たりしようとしたレイ様に、暴言を吐いたのです。そうしたら、ミセス・ディカーが鬼の形相で追いかけてきたのです。お分かりですか、アシル様」

「わかりました……ちなみに、その暴言とは……?」

「『お前は同性愛者の弟による犠牲者の一人にでもなればいいのです』といいました」

そ、それはあたしでも怒るぞ……?」

「ど、ドンマイですね……。ところで、いつまでかくまえばよろしいのですか……?」

「別にいいです。ジェル様でも脅して、どこか違うところにかくまってもらいます」

そついつて窓に足をかけたランドさんを、慌てて止める。

「ランドさんっ！ ここの階ですよっ！」

「二階ぐらいどつってことないのです。ランドならこのくらい骨折しないで飛び降りれます」

淡々というランドさん。

「ダメですってー！」

腰にしがみつくあたしを振り払って、ランドさんは窓から飛び降りました……。

第十七の問い「レイに質問。上手くいくと思っ？」

「……自由奔放な方ですね……」

窓の下をのぞき、ランドさんの姿を見送って、あたしはアシルさん一言いっ。

「そうですよね……」

げっそりしているアシルさん。

「そういえば、なんでジェル君のところに行くんですか？　かくまっつてもらうなら、ここでもいいのに」

「ジェルはランドの下僕的存在だからね」

あ、そういう意味か！。

納得したあたしは、アシルさんを引っ張り、部屋を出て行くことする。

「な、なんだい！？」

「レイなら、ランドさんの好みとか、知ってるかもしれないじゃないですか」

「でもっ……」

なんだか腰が引けているアシルさんに、あたしは喝。

「いいからくるっ！」

「……はい……」

今の女性は、まったく恐ろしい、などとぶつぶつ言っていた奴にけりを入れて、あたしはレイの部屋へと向かった。

Q、最終手段、レイに質問、かあ……うまくいくと思う？

A、考えたくもない。

「レイっ!」

ばたーんと盛大に扉を開け入ってきたあたしとアシルに、レイは読んでいた本を落とし、びくりとする。

「なんなのよその反応は」

「いや……」

冷静になろうとしているのか、軽く自分の頬を叩きながら、レイは答えた。

「こいつらに今、自分の感情をぶつけようかぶつけまいか悩んでいた」

目の前にあつた花瓶から、花を抜き取る。

「え、保崎さん、さすがにそれは」

ばっしやーん。

花瓶の水をレイにぶっかけたあたしは、満足げにうなづく。

隣で、アシルさんが顔を蒼くしながらあたしを見つめている。

「……………」

しばらくの沈黙の後、

「さっさと出てけ、この雌豚ッ！ お前の顔を、二度と、俺の前にさらすなッ！！ いいな!？」

水をしたたらせながら、唾の飛んでくるような勢いでレイに怒鳴られた。

あたしは反論しようとしたが、その前に、アシルさんに引きずられ、部屋を出て行った。

「ばかですかあなたは！ あんなプライドの高いレイに、水をかけるなんて………… ふざけるのもほどほどにしてください!」

ああ、パジャマ姿のまま、ついに外に出てきてしまった…………。

ここは一面に薔薇が咲き誇る、薔薇園らしい。甘い香りと鮮やかな色が、癒し効果に抜群らしい。

「ふざけてないです。あたしは自分の感情に忠実なだけで……………」

「それがいけないのです、それが！ ランドさんも見失ってしまっ  
たし、これからどうすれば  
「  
「呼びましたか？」

頭を抱えたアシルの背後から、げんなりしたジェル君を引き連れ

て登場したのは、ランドさんだ。

「ららら、ランドさんっ!?!」

「はい、ランドです」

うるたえるアシルさん。首をかしげるランドさん。  
それに。

「ほほほ、保崎さんもいらしたんですね……………」

顔を紙のように白くしたジェル君。

「いらしましたよ」

にこりと、営業スマイル。

ああ、なんだか大変なことになりそう……………な、予感……………?

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7429x/>

---

Q、異世界で逆ハーレムは成立するのか？

2011年11月7日09時02分発行